HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 研究のグローバル化の中における日本のロシア史研究 : Новый мир истории России. Форум японских и российских исследователей. К 60-летию профессора Вада Харуки / Под редакцией Бордюгова Г., Исии Н., Томита Т. Москва: “АИРО-XX”, 2001. 592 с. への書評 |
| Author(s) | ゲラシモフ, イリヤ |
| Citation | スラヴ研究, 50, 331-341 |
| Issue Date | 2003 |
| Doc URL | http://hdl.handle.net/2115/39022 |
| Type | bulletin (article) |
| Note | 書評論文. 露文より松里公孝が訳 |
| File Information | 50-013.pdf |

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

［書評論文］

# 研究のグローバル化の中における日本のロシア史研究

## Новый мир истории России. Форум японских и российских исследователей. К 60-летию профессора Вада Харуки / Под редакцией Бордюгова Г., Исии Н., Томита Т. Москва: “АИРО-XX”, 2001. 592 с. への書評

イリヤ・ゲラシモフ（露文より松里公孝が訳）

＜訳者解説＞

本稿の著者であるイリヤ・ゲラシモフは、カザニ大学卒業、ブダペストの中欧大学で修士号、合衆国のニュージャージー大学で博士号を取得した。1999年末にカザニに戻ってのち、中欧大学時代の同窓生とともに、露語・英語雑誌 Ab Imperio を創刊した。民族史研究を軸としながら、社会科学者・人文学者の討論のための国際的なフォーラムを提供することを課題とした同誌は、短期間の間に高い評価をかちとった。また、同誌の主幹編集者であるゲラシモフは日本におけるスラブ・ユーラシア研究の成果を同誌に反映させることにも熱心で、露語による和田春樹教授還暦論文集の刊行に多大なる関心を寄せることになった。

本稿は、ロシア語原文から松里が翻訳したものである。本書評の日本語による刊行は、何よりも著者自身の強い希望によるものである。論文集への寄稿者を含む個々の専門家が、自分が関わる論点について書評者の意見を読むことが目的ならば、正確性を期するために、本稿は原文のまま欧文雑誌に発表する方がふさわしかったかもしれない。しかし、本稿は、研究の基本姿勢にかかわる啓蒙・関心喚起の性格を帯びているので、ロシア史家の枠を超えて、なるべく多くの人に読まれる形で発表されるべきだろうと私は考え、『スラヴ研究』編集部もこれを支持した(1)。本稿は、とりわけこれから知的グローバル化の荒波の中に漕ぎ出そうとしている若い研究者にぜひ読んでもらいたい労作である。

ゲラシモフは、ロシア史学における国際主義者の最右翼として、日本側またロシア側の寄稿者が、どこまで国際的な史学史過程に統合される能力と意欲があるかという基準に照らしつつ、和田還暦論文集を読んでいる。これはこれでひとつの見識であるが、やや極端な立場であるとの印象を受けないでもない。歴史学は、どこまでいっても、史料を再構成することによる事実の再現という性格からは逃れられない。しかもこれは、多くの国の史学史に精通するのと同様に、容易な作業ではない。私は、和田論文集のロシア側寄稿者に共感するものでは全くないが、たとえばレニングラード学派についてゲラシモフがどう考えているのか知りたいと思う。レニングラード学派を、現状のま

1　なお、露語原文に直接目を通したい読者は、『スラヴ研究』編集部に露語原文のコピーを請求することができる。

ま、前時代の遺物として絶滅させてしまってもいいのかということを、私は常々考えるのである[2]。このような点で若干の違和感を抱きつつも、本稿が和田還暦論文集に対して期待しうる最も真面目な反響のひとつであり、日本人が耳を傾けるべき知見を多く含んでいることは間違いないので、これを読者に紹介するものである。

主に言語上の理由から、日本の研究者が行っているロシア史研究は、歴史家の世界的コミュニティーにおいてほとんど知られていない。それを考慮すれば、ほぼ20名の日本人（あるいは日本で働いている外国人）研究者の労作が、初めてロシア語で1冊の論文集として紹介されたという画期的な事態に際して、彼らの水準を知りたいと読者・評者が感じるのも当然であろう。もちろん、ここで「水準」と呼ぶのは、個々の歴史家の優劣ではなく、公刊された労作全体から拝察される史学史的な広がりのことであるである。

現代日本におけるスラブ学の創始者のひとりである和田春樹の還暦を記念する本論文集『ロシア史の新しい世界』は、実際、何らかの総括的判断を導く根拠足りうるものであるである。また、日本の研究者と並んで、およそ一ダースのロシア人研究者の労作も所収されているが、このことは、日露の学術的伝統を比較したいという当然の願望に読者を導くだろう。このような論文集を編纂したいというアイデアそのものが非常に興味深く有益なものである（本書の出版主体であるАИРО-XXという、ロシア人読者にとっては謎めいた名称で結ばれた歴史家集団は、このほかにも興味深い著作を世に出してきた）。

これ以前にも、私には日本の同僚との職業的な交流経験があり、そのおかげで、日本の歴史家がその中で仕事をしているところの「史学史的文脈」についての一定のイメージを、補足的なパースペクティヴとしてもつことができた。そうしたわけで、この論文集『ロシア史の新しい世界』に没頭した次第である。本書は、19世紀中葉から20世紀中葉にかけての約百年間のロシア史を扱っており、テーマとアプローチのいずれにおいても非常に多様である。吉田浩による巻頭論文「ロシア帝国の近代化と農民の親族慣習法。同時代人の論争」は、高水準の討論の場を提供するものである。著者は限られた紙幅の中で、歴史的文脈を創造するのに不可欠な史料からの引用と、現代の研究史の概観、そして自分の分析結果という三者間のバランスを保ちながら、明晰に論文を構築している。吉田の史学史的視野は広く、この時代とテーマについての日本の豊かな研究史に依拠しつつ、ロシアやアメリカの歴史家たちとの対話の上に自説を展開している。そもそもこうした姿勢こそが、世界のあれこれの地域の史学史的伝統が「国際的」なものであるかどうかの形式面での試金石なのである。言い換えれば、国外の専門家による研究がその国の史学史的伝統にとってどれほどアクチュアルであるか、また、その伝統に含まれている学術上の遺産がどれほど多様であるかによって、その国の歴史学の国際性は測られるのである。明らかに、吉田は、ロシア農業史の世界的・主導的な専門家と同じ言葉で語っており、このことが、彼の仕事が、遅かれ早かれ国際的な歴史学界から必要とされるものとなることを保障しているのである。

2　レニングラード学派再評価の必要性については加納格も近著の序文で述べている。加納格『ロシア帝国の民主化と国家統合：20世紀初頭の改革と革命』お茶の水書房、2001年、第7頁。

これに続く論文は、高橋一彦（ちなみに本書においては、日本人の名前に含まれるシュー音は、ロシア外務省の文書にまま見られる不正確な幼児語的翻字法[3]に従って表記されている。たとえば、Хироши と書くべきところを Хироси、Такахаши と書くべきところを Такахасиといった形で）による「1964年司法改革の再考に向けて」である。この論文もまた、著者がロシア、アメリカ、ドイツの史学史の最新の成果を出発点として分析を展開しているということそのものによって面白く、また歴史家にとって必読とも言うべきものとなっている。高橋の主張が同僚たちにどう受け入れられるかは別として、重要なのは、彼の説の独自性が現実の（そして最新の！）研究史との対話の上に成り立っているのであって、著者によって仮想された相手との「論争」の上に成り立っているのではないということである。それゆえに、この日本人学者は、田舎根性や「自転車を発明する」[4]大きな危険を回避するのである。

形式から内容へと考察を進めれば、吉田や高橋の研究の必要性と斬新性は、いっそう明らかになる。吉田は、本質的には、近代化の対象としての農民のモラル・エコノミーと近代化政策のイデオローグたちとの間の衝突という問題を提起している。この衝突（またモラル・エコノミーの概念そのもの）が、ロシア人史家にとって耳新しいものである。というのは、彼らには、農民または近代化主義者のいずれかに自己同一化してしまう傾向がいまだにあるからである。周知の通り、英米の史学史においては、この問題は、もっともホットな、論争的なテーマである。おそらく、この日本人研究者は、ロシア農村近代化に関する教養社会の努力、国の政策、農民の反応という三者間の現実の相互作用を理解する上で有利な、問題のつぼを押さえることに成功したのであろう。それを別としても、たとえばアメリカスラブ研究促進協会の 2001 年の年次大会で発表された、有名な研究者 Jane Burbank のペーパー “Civil Suits and Civility at the Volost’ Courts” などは、吉田の論文と驚くほど視点を共有するものである[5]。したがって、近い将来、吉田が先駆的に開拓しつつある方向に添った業績が大量に発表されることを期待させる根拠は十分にある。

研究のコンセプトという点では、高橋の論文も吉田のそれに劣らず面白い。高橋は、1864年司法改革を司法現象そのものとして意味づけることを主張し、その結果、同改革を、ロシアにおける現代国家建設や国民形成の重要な一要素として再解釈している。この視点が、ロシアおよび西側のロシア史研究にとって焦眉のものであり、また今後の発展可能性を孕んだものであることはいくら強調しても足りない。

ロシア農民共同体に関する最新の研究史をフォローした松里公孝の論文「個人主義的集団主義者、それとも集団主義的個人主義者?」は、日本のロシア史研究者が世界的史学史に統

---

3 ＜訳注＞原文では、сюсюкающие 。ロシア語の動詞 сюсюкать には、「シュー音（ш, ж）を歯音（с, з）で代用する」という本来の意味と並んで、「幼児の口まねをして話す」という意味がある。

4 ＜訳注＞「皆が知っていることを自分の新発見であるかのように吹聴する」ことを意味するロシア語のイディオム。

5 ＜訳注＞これについては、Gareth Popkins の諸労作も同様である。次を参照せよ: “Code versus Custom? Norms and Tactics in Peasant Volost Court Appeals, 1889-1917,” *The Russian Review* 59 (July 2000), pp.408-424; “Peasant Experiences of the Late Tsarist State: District Congresses of Land Captains, Provincial Boards and the Legal Appeals Process, 1891-1917,” *The Slavonic and East European Review* 78:1 (January 2000), pp.90-114.

合されうることについての真のマニフェステーションである。と言うのは、この論文は、農業史家の関心を惹く問題を提起すると同時に、ロシア・ソヴェト農業の発展の性格と方向をめぐる日本の史学史的伝統を国際的な論争の中に位置づける試みを意識的に行っているからである。日本、アメリカ、韓国、ロシアの歴史家の間に顔をつき合わせた対話がない現状で、それを仮想的、間接的に再構成しようとする松里の努力を見るとき、西側やロシアにおけるロシア農業史研究が、日本の同僚の業績を知らずまた知ろうともしないことによって多大な損害を被っていることを痛感せざるを得ないだろう。

以上の著者たちとは対極的に、長谷川毅とワシーリー・モロヂャコフの論文は、自分の祖国の史学史的伝統（問題設定、方法論、研究者の一種の気質）から離脱し、他国のそれに事実上完全に同化することによってなされうる、国際的な史学史への統合の別のタイプを提示している。長谷川毅の論文は、他の日本人の論文とは非常に異質であるような印象を受ける。これは偶然ではない。なぜなら、1969年にワシントン大学（シアトル）で学位を取得し、現在カリフォルニア大学（サンタ・バーバラ校）に勤務している、アメリカの歴史家以外の何者でもない長谷川が、「日本とロシアの歴史家の対話」なる副題を掲げる本書に参加したことは、形式的・アンケート的配慮の結果にすぎないからである。長谷川の卓越した論文「国家、社会、そして階級:ロシア革命期ペトログラードにおける犯罪、警察、国家」は、現代アメリカ史学史の模範とも言うべき論文である。問題設定そのものや、長谷川が提供するところの、言説分析によって「豊かにされた」タイプの社会史は、まさにこんにちのアメリカのスラブ学に特徴的なものである。なお、日本側編集者の一人である石井も、長谷川を「日本出身のアメリカ人ロシア史家」と呼んでいる[6]。

東京大学に所属しているワシーリー・モロヂャコフは、史料の豊かさの点で、ロシア語を母語とする現代の歴史家としてはきわめて稀な論文「敵対からパートナーシップへ:1930年から1941年にかけての白鳥敏夫と日本の対ソ外交」を書いた。総じて、日本の歴史学にとっては問題設定の具体性が重要なようであるが、モロヂャコフの仕事はこの要請に典型的に応えている。つまり、モロジャコフは何よりも日本の読者・同僚を意識しつつ書いているのである。同時に、モロヂャコフは、日本、ロシア、イギリス、ドイツ、イタリアのアーカイヴ史料と、日本語、ロシア語、英語、ドイツ語の二次文献を用いている。モロヂャコフの論文は、長谷川の論文が本書に参加したその他の日本人筆者たちの論文と好対照をなすのと同様に、その他のロシア人筆者たちの論文と対照的である。つまり、ここで問題になるのは、歴史家がどこで勤務しているかということではなく、彼が異なる史学史的文化の伝統と尺度をどれだけ深く自己に内面化しているかということなのである。言うまでもなく、長谷川、モロヂャコフの論文のいずれもが、筆者の形式的・実質的「所属」とは関係なく、自国史学の枠を超えて、人々の興味を喚起するものである。

しかし一方で、日本側参加者の少なからぬ論文が、以上に触れた論文が提示しているところの高度な職業的要請にこたえてはいない。佐々木照央は、こんにちのロシアにおいて知られていないか不当に忘れられていると彼には思われるところのピョートル・ラヴローフのよ

6 *Нориэ Исии*. «Азиатское иагнитное поле» исследователя России. Вместо заключения // Новый мир истории России. С. 569.

うな人物を読者に紹介することに、ナイーヴとも言える情熱を注いでいる（「ピョートル・ラヴロヴィチ・ラヴローフとは誰か...?　彼は祖国で忘れられている...」[7]）。佐々木においては、ラヴローフの著作からの際限ない引用が、様々な言語で存在しているラヴローフに関する膨大な研究史（もちろんこの研究史は、佐々木の想定とはうらはらに、A・ヴォロヂン、B・イテンベルグの「偉大な人物伝」シリーズの一巻に収斂するものではない）を分析することを代行しているのである。

中嶋毅の論文「『偉大な転換』期（1929-1930）における技術者団体の構造変化」は、面白い労作だが、狭い実証主義的アプローチの弊害を免れていない。中嶋は、この問題に関する現代の史学史認識を基本的にふまえながらも、この論文の中で、時代の社会政治的な文脈からは切り離して、技術者団体「それ自体」の歴史を扱うことによって、文化革命という現象を完全に無視してしまったのである。しかし、中島が描く像は、シーラ・フィッツパトリック、スーザン・ソロモン[8]、デヴィド・ジョラフスキー[9]などの労作に描かれている職種内対立や垂直的な社会的上昇の図式にぴったりとあてはまるものである。中島が自分の研究を、文化革命期の社会的・政治的プロセスの広いパノラマの中に位置づけていれば、もっと面白い、トリヴィアルではない結論にたどり着くことができただろう。

概して、日本側寄稿者の多くが、自分の研究対象の政治的な側面を分析することを避けようとしているように感じられる。それ自体はいいとも悪いとも言えない。政治回避の傾向は、伝統的に政治史の影に隠れてきた史実に光を当てることになるかもしれないし、また、これまで極端に政治色が強かったロシア現代史研究に従事する者として、政治分析に警戒心を抱くのは当然である。しかし、政治分析から距離を置くことによって、しばしば日本側寄稿者は、自分の研究の説明能力・適用範囲を著しく狭めている。つまり、それ自体としては面白い「ケース・スタディ」を、歴史の全体状況の一要素として分析することに成功していないのである。たとえば土屋好古は、国会開設後のロシア労働運動の起源を、社会民主主義者の非合法サークルにではなく、相互扶助組織やその他の合法協同組合に求めるという、労働運動の非常に面白い再解釈を試みている。政治闘争は労働組合の発生の一因でしかなかったと述べながら、土屋は労働運動やその合法的先行形態の政治的意義というテーマから意識的に距離を置いている。しかしながら、政治の領域の外でロシア帝国の最後の20年間の歴史を理解することは不可能なのだから、政治分析を拒否することによって、土屋は、あれこれの組織の狭いクロニクルを書く作業に自分を縛りつけてしまうのである。そもそも、この時期の最大の特徴は、政治の領域が形成され、そこに住民の各階層やグループが次第に包摂されたこと、つまり現代的大衆政治が形成されたことである。社会民主主義者やそれに続く史学史的伝統は労働運動形成過程における左翼政党の貢献度を過大評価してきたと論証しながら、土屋は、自分が新たに提示しようとしている学説が、この時代の政治過程についての

---

7　*Терухико Сасаки*. Петр Лаврович Лавров в полемике с нигилистами-народниками и с другим «я» // Новый мир истории России. С. 56, 57.

8　＜訳注＞スーザン・ソロモンの代表著作として次を見よ。Susan Gross Solomon, *The Soviet Agrarian Debate : A Controversy in Social Science, 1923-1929* (Boulder : Westview Press, 1977).

9　＜訳注＞デヴィド・ジョラフスキーの代表著作として次を見よ。David Joravsky, Soviet Marxism and Natural Science 1917-1932 (London: Routledge and Kegan Paul, 1961).

我々の理解をどのように変えるかを述べていないのである。論文に含まれているデータから察するに、土屋の研究は、アメリカのヘイムソン学派の枠内で形成されてきた労働運動史のパラダイムとそれが描いてきた「自覚的労働者」の集団的・政治的相貌を根本的に修正する可能性を持つ。しかし、土屋は、通常無視されてきたが、その時代の政治的文脈にとって巨大な意義を持った、勤労者の「政党外政治」史について語りながら、それを論理的結論（それゆえ予期される結論）にまでは推し進めないのである。

同様に、高橋一彦の既述の論文における1864年司法改革を伝統的な政治主義的解釈から離れて分析しようとする、出発点においては生産的な試みも、改革のまさに政治的側面にかんする著者の結論の提示なしには完遂されないように思われるのである。権力分立の強化、社会集団間の法の下での平等の追求、訴訟手続きにおける公開主義は、ロシア専制の性格を変えたのだ。改革は真空の中ではなく具体的な歴史的（とりわけ政治的）文脈の中で行われた。したがって、改革を機能論的・純粋法学的視点から検討しようとする高橋の考察の成功は、その反面で、彼の分析が潜在的に持っていた可能性を開花させなかったように思われるのである。

自分が選んだイシューに全面的に集中し、隣接する問題を無視してしまう日本の歴史家の能力は、おそらく、彼らが極端にプラグマティックで具体性志向が強いとの印象を、本論文集の読者の一部に与えてしまうだろう。現に、あるロシア人書評者は、本論文集について次のように述べた。「日本の同僚たちのテクストは、ある種きわめて『機能主義的』である。彼らはきわめて目的論的であり、歴史的題材は、概して、ロシアのこんにちの状況を分析するための道具として使われるのである」[10]。もちろん、このような感想の誤謬性は明白である。実際には、本論文集の日本人寄稿者の多くが自分の研究対象を広い歴史的文脈の中に位置づけるような明白で具体的な結論を出していないところが問題なのである。おそらく、これは、特定の史学史文化から生まれる、研究者の意識的な自制の結果であって、彼らの視野の狭さの結果ではない。たとえば、鈴木義一は、1917-1922年のロシア・ソ連における計画経済の確立に関する論文の冒頭で、このプロセスが同時代の欧州や日本におけるプロセスと類似していると指摘した[11]。ところが同じ論文の中で鈴木はこの命題に立ち返ることはない。たとえば、臨時政府やソヴェト政府の方策を規定した要因としてイデオロギーがどれだけの比重を占めていたか、あるいは反対に、どの程度、それらが危機状況の中で強いられた実際的措置に過ぎなかったかなどを考察する上で、これら諸国でとられた反市場的な政策を比較することは有効であったと考えられるのだが。そのかわり、鈴木は、個々の経済学者や政治家の言動や個々の機構・組織の動きに関心を集中するのである。方法論的問題を無視し、研究対象となっている時代への複合的なアプローチを拒否することは、現代の日本人歴史家の「生得の本能」というよりは、むしろ、何やら太古の伝統に捧げられた貢物のようであるような印象を受ける。こうした人工的な自制心を克服することは、史料を掌握している

10 *Руслам Шукуров*. Россия в «магнитном поле» Японии. Японские историки успешно осуществляют «ментальную колонизацию» в российскую историю и культуру // НГ-Ex Libris. №38 (258). 24 октября 2002 г.

11 *Ёсикадзу Судзуки*. Планирование и регулирование народного хозяйства при Временном правительстве и в первые годы советской власти // Новый мир истории России. С. 247.

ことにかけては傑出している日本のロシア研究者の仕事を、根本的に新しい水準へと導くだろう。

…このように、和田還暦論文集への日本側寄稿者の成功例、不成功例を際限なく列挙してゆくことは可能であるが、かかる可能性は、それ自体が、日本のロシア研究がきわめて多様かつ豊かな史学史的伝統を持つという印象を強めるのである。日本のロシア研究が、個々の研究者の業績としてではなく総体として、国際的な歴史論争にすでに参入したということは疑いない。本論文集の出版の意味はまさにそこにある。

本論文集が「日本とロシアの研究者の対話」という副題のもとに出版されている以上、評者としては、日本側寄稿者の労作の検討に作業を限定することはできない。私は、ロシア側寄稿者、つまりАИРО-XXに結集する歴史家たちの論文を読むにあたって、日本人の論文を評価したのと同じ基準、つまり、彼らが提示するところのロシア史学史が、どの程度、国際的な統合性と競争力を持つのかという基準に依拠した。ロシア側寄稿者の諸論文も、日本側のそれと同様、成功の度合いにおいて様々ではあるが、全体としての結論は、情けないことだが、彼らの国際競争力など語るべくもないというものである。彼らの仕事は、むしろ「帝国の田舎根性」の様相を呈している。つまり、自分の国の歴史を自分の母語で研究している人々が、そのパスポート的な事情そのものを、あたかも自分が、国外の学術的達成や、職業的歴史家としての多くのスタンダードを無視して憚らない根拠であるかのようにみなしているのである。日本の同僚たちが外国語の史料を掌握し、（しばしば）いくつかの言語の歴史文献に通暁し、現代の史学論議を踏まえて仕事をしているのと比べれば、ロシア側参加者の論文は、「かなりできがいい」ものでさえ、凡庸か、より中立的な表現を用いれば「地方的な」印象を与える。ましてや「かなりできの悪い」論文に至っては、国際的フォーラムや外国の同僚との比較の中では、その弱さがますます目立ってしまう。

ロシア側参加者に共通する特徴は、根拠薄弱な一般化への志向である。これは、日本の歴史家が具体性を重んじるのと比べれば一目瞭然である。しかも多くのロシア側参加者の理論構成は文字どおり火縄銃水準のもので、「彼らの」テーマを研究するにあたって国際的に蓄積されてきた研究モデルを全く知らないのである。したがってこれらの先行モデルが批判も論駁もされないままに、筆者たち自身のコンセプトが、まるで学問における最後の（そして最初の）言葉であるかのように提示されるのである。

しかし、ロシア側参加者のこのような研究姿勢を理解することは困難ではない。なぜなら彼らが選んだテーマは研究史上かなりの蓄積があるものばかりであり、したがって彼らは、様々な言語で書かれた多くの文献を実際に読むのか、それとも「アメリカを発見する」（わかりきったことを言う）のか、二者択一を迫られるのである。リュドミラ・ガタゴワは、ロシアの反ユダヤ主義に超越論的（先験的）な性格を付与することによって、この問題に関するアメリカ、イスラエル、ロシア、その他の国で出版されてきた、文字どおり汗牛充棟の諸文献を迂回しようとした。彼女の論文「ユダヤ人嫌い：悪意の総和」においては、「エスノ・フィビヤ」（どうやら、ゼノフォビヤ、つまり外国人嫌いとは別の概念のようだ）現象を扱っており、その結論の節もまた、「悪意の本性」と控えめに銘打たれている。その際、民族間対立の本性の解明は、民族学辞典『エトノス、民族、社会』（モスクワ、1996年）に基づいて行われており、ロシアの大衆心理の機能的特質は、わが国の生理学の古典によって説明さ

れている。「ロシアの偉大な生理学者Ｉ・パヴロフの観察によれば、ロシア人にとって第2信号系、つまり言葉は、第1信号系（つまり、本質的には、現実そのもの）よりも、常により優先的な意義を持っていた」（107頁）。どうやらガタゴワは、意味論を創出する途上にあるようである。

ガタゴワのアプローチと問題設定の仕方を、アレクサンドル・クプリヤーノフの論文「大ロシアとシベリア：帝国の紛争の海の中における民族的平穏の大陸（1881-1904）」は一層発展させている。彼は論文冒頭で、「大ロシア諸県とシベリアにおける民族紛争をテーマとした労作はいまだ一つも現れていない」と宣言し、国外の、またロシアの地方史研究から生まれた豊かな史学史を完全に意識的に無視している(12)。こうした架空の史学史的空白の中にあって、クプリヤーノフがさらに地方アーカイヴを無視していること（論文はロシア連邦国家文書館所収の警察局フォンド（Ф. 102）しか使っていない）が、どの程度意識的選択の結果であるのか、評者には知る術もない。

こうした「先駆者」の運命は悲惨である。クプリヤーノフは、どうやら、「民族的自覚の発生」や民族間の相互作用過程一般に関する現代的研究モデルを全く知らないのである。彼は、警察史料の束の中から、「非ロシア人」について書かれたエピソードを拾い集めるだけである。彼の想像力を特に驚かせたのは、カルムイク人反抗者の「ロシア人から借用したものをすべて殲滅せよ。ロシアのツァーリが描かれた貨幣に始まって、ロシアのツァーリが描かれた貨幣に至るまで」という呼びかけである（132頁）。これらエピソードを総括しながら、クプリヤーノフは、「民族紛争」の五つの特徴を指摘するが、それら五点は、基本的に、抗議行動がアルカイックなものだったということに収斂するのである。著者は、大改革後の時代（アレクサンドル2世の治世）と1881-1907年の時期とで紛争に基本的な違いはないと結論している（134頁）。もし、19世紀ヨーロッパの抗議行動を研究した文献（せめてチャールズ・ティリーの古典）や、ロシア帝国の伝統的な制度を扱った現代の研究（シーモア・ベッカー、リチャード・ウォルトマンなど）を読んでいれば、抗議行動の伝統的な形態がすこぶる現代的なイデオロギー的・社会政治的内容を包含しえたことがわかっただろうに。

しかし、Ｂ・アンダーソン、Ｅ・ゲルナー、Ｅ・シュミット、Ｍ・フロッフらの偉業のみが、これら、前世紀ロシア社会のある種の歴史家をいらつかせるわけではない。これら「民衆的な」方法論（「民衆的意味論」からの連想でこう名付けよう）のもうひとつの人気分野は、大衆の意識の機能メカニズムと大衆社会のダイナミクスである。Ｄ・ルカーチやＥ・カネッティ、Ｍ・フーコーやＪ・ハーバーマスの理論構成は、イリーナ・ダヴィチャンの下記のエレガントな定式の前には、言葉多く無駄だらけのもののように感じられるだろう。「大衆の意識といったとき、私は、あれこれの社会集団（たとえ巨大集団であっても）の意識を念頭においているのではない。それら部分的集団意識のいわば合成物のようなものを念頭においているのである」（277頁）。かくして、ダヴィチャンにおいては、大衆心理の「形成（устройство）」という問題そのものが、ひいてはそれを構成する社会的諸集団の意識が排除されるのである。まあ彼女は歴史家なのだから、集団意識の「合成物」とは一体何

12　モスクワを離れるまでもなく、せめて中央雑誌《Диаспоры》をひも解けば、シベリアの歴史家たちの仕事を容易にフォローすることができただろうに。

なのかを説明できなくてもやむをえないとしよう（どうやらそれは、「ひとつの頭脳の中での多元主義」という言葉の婉曲表現のようである）。わが国の歴史家は、哲学や社会学の専門文献を読むようには躾けられてはいないのだから（ただしレーニンの著作は例外で、そのことは、ダヴィヂャンの論文の注を見れば明らかである）。しかしながら、いやしくも「ロシアのポスト革命期の大衆意識」を論じた論文で、大衆心理の研究のために引用された史料群の性格を明記することは、伝統的ソヴェト史学においてさえイロハであったはずだ。残念ながら、筆者はそれすら行っていない。ダヴィヂャンは、時代意識の「合成物」の基本要素を、ただニコライ・ベルヂャーエフの権威をときどき借りるだけで、先験的に列挙する。そして、自分のその観察の解説として、ОГПУ資料とも農村通信員の手紙ともつかぬおびただしい引用を行っている（ただし、明示されているのは社会政治史ロシア国家文書館とロシア連邦国家文書館所収のフォンド番号のみである）。かくして、1920年代の「ロシアの大衆意識」とは、チェキストの視点から選別されたものや、ソヴェト新聞の自発的農村通信員の不安な心の「合成物」だったということになるのである。

スターリン時代のソヴェト・インテリゲンツィヤとその社会的進化をテーマとしたゲンナージー・ボルヂュゴフの論文も、この問題についての豊かな文献（特にアメリカのそれ）に言及していない。一見理論的に感じられるタイトル（「『スターリンのインテリゲンツィヤ』：その社会的行動のいくつかの意味と方法」）にもかかわらず、筆者はなんらかの（せめて自分なりの）全体モデルを構築しようとしていない。我々に提供されるのは、むしろ、古典的歴史叙述、一般的な話の筋に沿って結び付けられたエピソードの羅列である。

一見、АИРО-XXのグループの中で最も神秘主義的な著者であるところのウラジーミル・ブハラエフの論文「ボリシェヴィズムの理想的教科書。全露共産党（ボ）小史」においては、他のロシア人著者たちと比較すれば、多様な二次文献が引用されているように一見感じられる。たとえば、「『歴史の文化』の概念の内容と認識論的意味について」、著者は、パンフレット「歴史的知識の提供と新しい多メディア技術」を参照するよう推薦している（文末注21）。しかし、たとえばジル・ドゥルーズ（Gilles Deleuze）[13]の逐語訳を思わせるようなポストモダンな文体にもかかわらず、著者は、ポジティヴィスト的・正統的認識論の立場を放棄していない。「プロレタリアート（その実、マージナル化された都市階層）と極貧農（現実には、共同体的モラルエコノミーのアウトサイダーたち）との間のブロック、連合（実際には、反所有者的な志向の集合体）、すなわち社会主義革命が成立した」（324頁）。言葉を用いた勇敢な実験や哲学的・社会学的概念を文学的幻影（simulacre）で置き換えようとする試みにもかかわらず、著者は自らのすこぶる全体主義的なディスコース（「その実」、「現実には」、「実際には」等々）を隠蔽することに成功していないのである。

ロシア史家の先輩世代を代表し、ソヴェト史学の古典を体現するはずの人々、G・M・アヂベコフとV・P・ダニーロフの論文は、シュールリアリスティックな印象を残す。論文「1950-1951年におけるコミンフォルム再編の試みの失敗（新たに発見されたアーカイヴ史料に基づいて）」において、グラント・アヂベコフは、1994年に出版された自分自身の本との

13 〈訳注〉ドゥルーズについては、さしあたり次を参照せよ。http://pratt.edu/~arch543p/help/Deleuze.html
邦語で読める代表著作は、『意味の論理学』(法政大学出版局、1987)。

対話に熱中する。ときどき和田が引用されるが、この問題についての史学史へのそのほかの参加者には全く言及されないのである。かつて閲覧が許されなかったアーカイヴ史料からの膨大な引用は、この欠陥を補わない。なぜなら、史料の取捨選択と解釈は、かなりの程度、この論文には欠如しているところの史学史的文脈に左右されるからである。

ヴィクトル・ダニーロフのポグロム的論文「『ペレストロイカ』の歴史から（60年代人＝農民問題専門家の体験）」は、読者に暗澹たる印象を残す。この論文で、「農民問題専門家＝60年代人」は、まずエリツィンによる最高会議砲撃を支持した歌手の故ブラート・オクジャワを痛罵し（「彼は自分の貧しい才能を、大きな恥で包んだ」(14)）、「真の社会主義」の墓堀人を糾弾し、何かを成し遂げる間もなく没したユーリー・アンドロポフの運命を悲嘆し、ゴルバチョフ下での農業政策立案への自分の参加について語るのである。このソ連経済史家の経済的見解（「国家計画制度の保持の下で、ソヴェト経済における商品貨幣流通をより広範・組織的に利用する」可能性、等々）についてここで論評するつもりはないが、ダニーロフの論文を読んだ者は、歴史についてのひとつの重要な結論に到達せざるを得ないだろう。つまり、ソ連末期の食糧難は、経済政策の立案を経済学者にではなくコルホーズ史家に任せるような状況そのものによって、すでに準備されていたのである、と。...

全体として、ロシア側の参加者は、АИРО-XXという共通の団体に属していながら、共通の方法論的アプローチと研究手法を備えたなんらかの史学史的伝統を共有しているようには見えない。論文テーマについてすでに膨大な文献が書かれている場合にさえ、多くのロシア側筆者は先行研究や同僚の研究を無視する傾向があるが、そのこと自体、彼らが単一の史学史的プロセスに統合される能力もなければその準備もないということをあらわしている。しかし、この統合こそが、歴史学が科学として存在するための唯一の手段なのである。

ロシア側に真の国際協力の準備がないことは、論文集という「フォーラム」の組織のされ方自体によって証明されている。私がAb Imperioの主幹編集者として働くようになって3年たつが、ロシアの各地から、書評を求めて多くの大学出版物が送られてくる。その多くは発行部数が100から300で、劣悪な紙を用いたものである。しかし、本書ほどに悲惨な印刷物を手にしたのは過去3年間で初めてである。書誌情報の欄に書いてある「オフセット印刷」は、安いリソグラフ印刷にも劣る代物で、文字の横線が満足に印刷されていない（したがって見えない）。нとпの見分けがつかないことは本当に苛立たしい。編集に関して言えば、そもそも書誌情報の欄に文体編集者（せめて校閲者）の名がないことからして、事態の深刻さを雄弁に物語っている。本書の編者たちは、原稿を、語学上のごく基本的な知識を持った者による校閲にかけることを無用の贅沢と考えたのである!

このような事態は、何よりもまずロシア側編集者の深刻な「地方性」をあらわしている。人生のうちたとえ一度でも外国人の聴衆の前で外国語で報告したことのある者なら（仮に口頭でなく、文書発言であってさえ）、テキストがあらかじめネイティヴ・スピーカーに点検されていることがどれだけ大切か知っている。ゲンナージー・ボルヂュゴフは、そのような可能性を日本の同僚に与えなかったのである。また、だからといって全ての日本人執筆者が

14 *Виктор Данилов.* Из истории «перестройки» (переживания шестидесятника-крестьяноведа) // Новый мир истории России. С. 413.

論文を校閲してくれるような「自前の」ロシア人を見つけられたわけではない。その結果、論文集は生硬な文章と滑稽な間違いのモザイクとなってしまった。たとえば横手慎二の論文における語学上の間違い（子爵 виконт を英語に引きずられて Вискаунт と書いてしまうなど：507頁）がもし宥恕しうるものだとしても、日本・中国の固有名詞表記が編集上の調整を経ていないことは、それよりはるかに深刻な問題を惹起する。多くの読者は、横手論文における Чан Цолинь（511頁）とモロヂャコフ論文の Чжан Сюэ-лян（523頁）とが同じ人物（張作霖）であることに気がつかないだろう。ましてや、文章の校閲を省いたために論文の大半が理解できないなどということは絶対にあってはならないことである。たとえば、加納格は、全体から察するに非常に面白い論文「20世紀初頭のロシア帝国における政治改革と諸民族の統合」を論文集に献じた。しかし、どんなに良心的に読もうとも、彼のテキストの3分の2は理解をすり抜けてしまう。

さらには、ロシア側「ネイティヴ・スピーカー」たちの、自分の文章に校閲など要らぬという自己過信は、彼ら自身に「たちの悪い冗談」となって降りかかった。いくつもの言葉を知り、ロシア語で作文している日本人の同僚たちには許される（あってもよいという意味ではない）ことでも、通例自分の母語しか知らず、しかもその母語で作文しているロシア人には断じて許されない。ここでは、ロシア側参加者によって犯された格変化や動詞・人称変化に関する間違い、句読点の間違い等々を列挙する紙幅のゆとりはない。本稿は学術出版物の書評であり、書き方教室ではない。間違いを見つけたいと思う読者は、何の苦労もなく任意のページにそれを見つけることができるだろう。私が、失礼を恐れず、日本側寄稿者の間違いの例をもって示そうとしたのは、基本的な語学上の正しさを要求することは、形式主義者の言いがかりなどではないということである。いやしくも外国の同僚たちと共通の言葉を見つけようと思う者ならば、まず言葉を正確に使わなければならない。相互理解は容易に得られるものではない。

...各種のアルテリやカルテルへの私の懐疑にもかかわらず、松里公孝の寄稿論文中の一文を若干モディファイすることで本書評を締めくくりたい。「総じて、ロシア史家には、個人主義者である権利はない。『一緒に（миром）働いた方がいい』。おそらくこの言葉に、苦労の多いこの研究分野に身を捧げた者に許される学術的・道徳的な喜びが集約されている」（199頁）。日本の歴史家たちの最良の労作の中に、我々は、ロシア史研究を発展させる唯一の道を見る。それは、異なる国民的史学史的伝統から輩出された同僚たちと幅広く交流し、協力し合うことである。「個人主義者」、つまり「自転車の発明家」にとどまろうとする試みは滑稽で無学である。そこには未来はない。